

# 中世末期の物語文の主題 — 『天草版伊曾保物語』 において —

西 本 勝 博

## 1 対象と目的

本稿では中世末期の口語資料『天草版伊曾保物語』（以下、『伊曾保』と記す）を対象として「ハ」の様相を記述し、特に事象叙述文における「ハ」を中心に考察したい。具体的には、以下の3点について指摘する。

①『伊曾保』の「ハ」には、文からの要請に基づくものと、談話からの要請に基づくものがある（第2節にて）。

②談話からの要請に基づく「ハ」は、一般で言うところの対比用法と思しき様相を示している（第3節にて）。

③「主題化」という観点から見ると、『伊曾保』における「ハ」は、無助詞で提示されているものとの対立で捉えられる（第4節にて）。

なお、本稿では『伊曾保』のうち「伊曾保が生涯の物語略」の地の文における「ハ」を主として考察し、それ以外は参考として見た。

## 2 現代語における「ハ」の分類

『伊曾保』を観察する前に、まず本稿での基本的な考え方を示す意味で現代語における主題「ハ」について確認しておきたい。益岡（2004）では、文の叙述の類型によって、「ハ」を大きく2つに分けて考えている。すなわち、「文内主題」と「談話・テキスト主題」である。文内主題とは、ある対象の属性を表している文である属性叙述文に現れる主題のことで、「太郎は優しい」の「ハ」がこれに当たる。文内主題では、文内部の要請によって「ハ」とマークされるものであり、属性叙述文においてはこれが基本となる。したがって「太郎が優しい」という文は有標的である。

それに対して、談話・テキスト主題とは、ある事象を叙述している事象叙述文に現れる主題のことで、「太郎は笑った」がこれに当たる。談話・テキスト主題では、文外部からのなんらかの要請によって派生的に「ハ」とマークされるものであって、こうした「ハ」のことを「主題化」と呼んでいる。

概略示すと、次のように纏められる。

「文内主題」： 属性叙述文。 例「太郎は優しい」

「談話・テキスト主題」： 事象叙述文。 例「太郎は笑った」

文の類型に基づく、こうした益岡の分類は、『伊曾保』の「ハ」を観察するうえでも非常に有効と考え、文内主題と談話・テキスト主題に区別して見ていくことにする。

まず、文内主題について、『伊曾保』における例では次のようなものがある。

- (1) エヂットの国はゼンチョで猫を崇敬するによって、旅宿の亭主がこのよしを奏聞すれば、観感をなやまされ、エソボを召して (439)

この例では、「エヂットの国」という対象について、「猫を崇敬する」という属性が述べられている。ここで注意すべきことは「エヂットの国は」と「ハ」でマークされているからと言って、この主題が、意味的に節を越えて後続の節に係っていくようなことはない。こうした事情は、小松(1997)で言う「接続構文」とも関係があるように思われる。「接続構文」とは、古典作品に典型として見られる「数珠つなぎ」のような文構造のことである。文構造の特徴としては次のようなものが挙げられている(ここでは便宜上、近藤(2000)に纏めてあるものを示す)。

- ① 句節をつぎつぎと継ぎたす
- ② 口頭言語と共通している
- ③ (文と文を車両に喩えれば)連結された各車両は、仕切りの扉を開けて通行可能である(相互に意味が関連している)
- ④ 読み手に先が見通せず、最後がどのように結ばれることになるのかわからない

つまり、現代語では往々、「ハ」でマークされた主語が従属節を越えて、後続の節に係っていくという現象が見られるわけであるが、古典語では数珠つなぎであるために、こうした読みが難しくなる。こうした事情は『伊曾保』における「ハ」の様相とも密接に関係があるように思われる。

次に談話・テキスト主題の例を見る。

- (2) シャントは「必ず明日飲まうず。もしまた飲み損ずるにおいては、一家の財宝をことごとく賄賂に進ぜうず」と言へば、相手もその分約束して、互いに環を取り換い

た。(417)

この例では、「シャントが～と言った」という出来事を表す事象叙述文である。「シャント」を「ハ」でマークして主題化しているのである。文章における主題化について考えると、この事象叙述文における「ハ」の様相を見ることが肝要と思われる。

次節では、この事象叙述文に現れる、談話・テキスト主題を取り上げて観察する。

### 3 談話・テキスト主題

前節で取り上げた例(2)には、実は、前部分がある。合わせて改めて示してみる。便宜上見やすく節(あるいは句)ごとに区切っておく。

(3.1) シャント「たやすう飲まうずる」と領掌をせられた時、

(3.2) その人の言ふは「もし飲み尽くさずは何と」と。

(3.3) シャントは「必ず明日飲まうず。もしまた飲み損ずるにおいては、一家の財宝をことごとく賄賂に進ぜうず」と言へば、

(3.4) 相手もその分約束して、互いに環を取り換えた。(417)

最初の文(3.1)では、主語である「シャント」が無助詞の形になっているわけであるが、3.2)では「その人の言ふは」と「ハ」で主題化されている。続いて(3.3)では「シャントは」と「ハ」でマークされ、その次の(3.4)での動作主は「相手も」のように「モ」という取り立て助詞が用いられている。動作主に注目して、概略、図にすると次のようになる。(無助詞は●で示す)

(4) シャント<●>、～その人の言ふ<は>。～シャント<は>、～相手<も>

つまり、「その人の言ふ」という「ハ」でマークされた形を受ける形で、主題化された「シャントは」があり、同様に「相手も」があると考えられる。こうした事情は、「言うは」「思うは」といった埋め込み文になっている「(ガ、ノ、無助詞)+ハ」の形に顕著に現れる。特徴的と思われる一連の文章の箇所を次に抜粋してみる。

(5.1) その時、エソボ●かの2人の言いやうを大きにあざけったところで、

(5.2) シャントエソボに問わるは、「そちはなんとしたものぞ」。

- (5.3) エソポが言うは「われは人間でござる」
- (5.4) シヤント怪しうで言わるるは「われにそれをば問わぬ、なんたるところに生まれたものぞ」。
- (5.5) エソポ答えて言うは、「母の胎内から」と。
- (5.6) シヤントまた言わるるは、「身はその所をも問わぬ、そちはどこで生まれたぞ」。
- (5.7) エソポ答えて申すは、「上に産んだか下に産んだか存ぜぬ」と言うて投げのけたれば、

ここに示した文は、エソポとシヤントの会話の場面である。最初の文 (5.1) の主語「エソポ」は無助詞の形になっているが、それに続く (5.2) 以降、すべてのやりとりは「言うは」などの形で主題化されている。引き続き、この後続の部分も見てみる。

- (5.8) そのときシヤント●「そちと問答をするならば、終わり果てがあるまい。まづその方は何事を知ったぞ」と言えは、
- (5.9) (主語無表示、動作主はエソポ)「何事をも存ぜぬ」と言うところで、
- (5.10) シヤント●また「なぜにおぬしは何をも知らぬと言うぞ」と言わるれば、
- (5.11) エソポ●「くだんの兩人がごとく存じつくいたによって、わたくしが存ずるために何も残りませぬ」と答えたところで、

ここでは、主題化されない形（無助詞あるいは主語無表示）が続いているのであるが、また、これに続く一連の文では主題化されている（主題化されていない、この部分については次節で述べる）。

- (5.12) シヤント●「これは興がったものぢゃ」ところえて、また言わるるは「そちを買はうと思うが、なんとあらうぞ」と。
- (5.13) エソポが答えて言うは、「誰かそのことをしいて勤むるぞ」と。
- (5.14) シヤントの言わるるは、「買うてから後に逃げうと思うか、なんと」と。
- (5.15) エソポが言うは「われ逃げうと思わうずる時は、御迎へその御意をば得まじい」。

(413)

筆者がどのように文章を構成していくか、あるいはどのような視点で書き分けて表現していくかということ自体は、おおよそ恣意的なことであると考えられる。ただ、文章を構成していくうえで何らかの傾向なりがあって、それによって区別がなされていることは上の例か

ら見て取れると思われる。

すなわち、主題化している部分では両方を主題化し、そうでない部分においては両方とも「ハ」でマークをしない無主題の形になっている。どちらか一方に「ハ」を用いているわけではない。主題化してある部分では、シャントとエソポの2人の登場人物を取り上げ、会話のやりとりを対比させて描いているのである。

次に以下のような例を挙げてみる。

- (6.1) そこで、エソポ●シャントに言ふは、「善うこそ先は申しだれ、御覽ぜられい、犬は棄てまじいけれども、上さまは棄てさせられてこの分てござる」と言うたれども、
- (6.2) シャントは、え思ひ切らいで、親類を頼うで、「ふたたび帰らあはれい」と妻をのまるれども、
- (6.3) (主語無表示、動作主はシャントの妻) これにも同心せねば、
- (6.4) シャントは思ひの余りに、すでに気を煩はせらるるやうにあつたによって、
- (6.5) そこでエソポが申すは、「少しもご氣遣いあられそ、たやすうお仲を直しまらせう」と言うて、その手段をたくんだ。(424)

ここでもエソポの発言に対し、シャントが行動を起こすというものである。このように見ていくと、「伊曾保」に見られる「ハ」は、必ずしもある登場人物の単独の行動において用いられているというのではなく、2人の登場人物をコントラストで描くときに出現する傾向にあることが分かる。ただここで注目するのは、「これにも同心せねば」という部分である。この動作主体はシャントの妻であるが、「ハ」で主題化されることもなければ、主語を表示してもいない。これは、当該の部分に注意が注がれているのがエソポとシャントの会話のやりとりであることと決して無縁ではないだろう。エソポとシャントを中心に描いていくうえで、シャントの妻は奥に引込んだ描写になっているのだと考えられる。

その他、こうした対比的な形で主題化している例をいくつか挙げておく。

- (7.1) 年長けたひとびとは「先づエソポに談合してお返事を申さうずる」とあつて、「いかに」と問へば、
- (7.2) エソポ答へて言ふは「一切人間のナツラの教へには、自由を得うことも、又は人に使はれうことも、(以下略)」と申した。(428)

- (8.1) あまつさえ帝王后妃までも車を立て並べて、ここを先途と見物させられたに、

(8.2) エソポはかねてたくんだことなれば、件のグリホを四ところに置いた。(436)

(9.1) 島中の悪人ども詮議していふは、「エソポは聞ゆる学匠ぢやに、ここを去つてわれらが悪名をいはば、(以下略)」というて、(中略)つひにはエソポを山上に連れてゆけば、

(9.2) (主語無表示、動作主はエソポ) 最期とこころえて譬えをのべて言うたは「もろもろの虫どもが (以下略)」と言ひをはれば、高いところから突きおといて、殺いてのけた。(441)

「ハ」の一つの機能として、談話をなんらかの形で結束させるということが言われる。たとえば益岡(2004)では、報道文をとりあげ、事象叙述文の「ハ」が談話・テキストにおいては、構成する各ブロックのまとまりを示しているという。

ここで取り扱っている『伊曾保』は物語文であるため同一視することはできないが、このようにしてみると、『伊曾保』における「ハ」は談話のまとまりを表したりするのではなく、ある登場人物を2名を取り上げ対比させていることが分かる。(注1)

#### 4 「ハ」と無助詞の対立

この節では、「ハ」と無助詞の関係について見てみたい。

先程、例(5)で挙げた一連の文章のうち、「ハ」で主題化されていない部分、言い換えれば無助詞で提示されている部分を再掲する。

(10.1) そのときシャント●「そちと問答をするならば、終わり果てがあるまい。まづその方は何事を知ったぞ」と言えは、

(10.2) (△主語無表示の形、主語はエソポ)「何事をも存ぜぬ」と言うところで、

(10.3) シャント●また「なぜにおぬしは何をも知らぬと言ふぞ」と言われるれば、

(10.4) エソポ●「くだんの兩人がことごとく存じつくだいによって、わたくしが存ずるために何も残りませぬ」と答えたところで、

「ハ」の使用不使用がどのように切り替わるのかという点に注目する。前述したとおり、作者がどのように描くかは恣意的であるが、そこに現れた談話をテキストとして考察し特徴を考えてみようと思う。

まず(10.1)の冒頭にある「そのとき」である。こうした、時を表す表現が改めて登場し

ていることがまず注目される。ここはシャントとエソポが会話をしているという事実は明らかであり、エソポが発言したことを受けるならばシャントしか存在せず、また予想不可能な事態や新たな展開が起こっているわけでもない。そこへ来て「そのとき」とすることで、「ハ」でマークされ続けたやりとりに対し、シフトチェンジを起こしていることを表示していると考えられる。(注2)

また、この(10.2)(10.4)で現れる接続表現「ところで」も示唆に富んでいる。「ところで」は中世末期当時においては、前件と後件になんらかの因果関係を表すとされる原因理由を表す形式とされる。ここでも、エソポの発言内容に応じて、シャントが答えるという点で「ところで」の前件と後件にはなんらかの因果関係が存すると考えてよかろうと思われる。この「ところで」は言わずもがな「ところ」という場所を意味する形式名詞に由来している。こうしたことを踏まえると無助詞で表されている、この(10)に掲げた一連の文章は、事実描写に徹した表現であることが窺えるのである。

つまり、「ハ」を使って表した文と無助詞を使って表した文では、前者が、特定の人物を取り上げて対比的に描写しているのに対し、後者はただ事象をありのままに描写したものであるという対立で捉えることができるのではなかろうか。

## 5 まとめと展望

金水(1995)では、次の文に見られるような「は」は、通常、現代の小説の文体などでよく目にするものであって、これを「語りのハ」と名付けた。

(11) 太郎は重い荷物を軽々と運んだ。

そして、その特徴として、以下を指摘した。

1. 述語は動詞によって構成される。典型的には、「動詞+タ」で終わる文である。
2. 文の内容は、恒常的な属性ではなく、特定の時間・場所に関連づけられた具体的・一回的な出来事である。
3. いわゆる主語(ガ格名詞句)、典型的には動作主を指し示す名詞句がハによって提示される。
4. 当該のハにはいわゆる<対比>の意味はほとんど含まれない。

今回、「伊曾保」で観察した「ハ」は、上記4つの特徴のうち3つまでを満たすものであった。すなわち、1について、述語は動詞によって構成されている。2について、特定の時間・場所に基づく具体的・一回的な出来事である。3について、「ハ」は動作主をマークしている。

残る4については、談話からの要請によって対比と捉えられる様相を示しており、この点において「語りのハ」はいまだ完成を見ていないものと思われる。

今回、観察の対象を「伊曾保」に限定しておこなったが、同時期のそれ以外の資料におい

てどのような様相であるか、また、こうした対比的な意味がどの時期にどのようにしてなくなるのかという史の変遷については次稿に期したいと思う。

(注)

- (1) 現代語における「ハ」と「ガ」の使用の区別を、談話分析の視点から考察した研究にメイナード(1993)がある。そこでは「ステージング(上場化)ストラテジー」という概念を用いて「ハ」の使用を見ている。例えを用いて、「ハ」でマークされた動作主体に対しては絶えずスポット・ライトが当たる様子を表しているとし、その人物を中心としてテキストに結束性を持たせているのだとする。そうでない「ガ」でマークされた人物の事象は出来事の進行を中心に描かれているとする。しかし、中世期の『伊曾保』における「ハ」の使用は登場人物のどちら一方ではなく、両方に「ハ」が用いられていることを踏まえると、この考え方は『伊曾保』においては適用できないと考えられる。
- (2) 逆に、(3.1) から (3.2) にかけては「時」の前後で、無助詞から主題化した形へと移行していることから、「時」が無助詞と主題化を変更する際のマークとも考えられる。

<参考文献>

- 金水敏 (1995) 「「語りのハ」に関する覚書」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版所収  
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房  
小林賢次 (2005) 「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』222  
小松英雄 (1997) 『仮名文の構文理論』笠間書院  
近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房  
泉子・K・メイナード (1993) 「談話分析の可能性」くろしお出版  
野田尚史 (1996) 「「は」と「が」」くろしお出版  
益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版  
益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版  
益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」『主題の対照』くろしお出版所収第1章

(にしもと かつひろ 岡山大学大学院文化科学研究科)